20220227　　猪高の森自然観察会　2022 年 2 月報告書

猪高の森自然観察だより　2 月号

開催日時：2022年 2 月 27 日（日）　9：30～12：00
天候：曇り時折雨がぱらつく　気温：最低 2.1℃、最高 12.0℃
テーマ：カエルの産卵を見よう・ほころび始めた木の芽たち
参加人数、構成：一般 20 名（うち NACS－J 指導員 3 名、保護者 3 名）、小学生以下 3 名
コース：森の集会所　→　シダレザクラの里　→　こもれび池　→ハンノキ湿地
→　井堀の棚田　→　畑　→　森の集会所

2 月も下旬になると、まだまだ寒さは残るものの、そこかしこで小さな春の息吹が感じられるようになります。あなたにとっての小さな春は何でしょう？
この日は、下見をした 18 日から若干経っている為もあり、もっと春が近づいていると思っていましたが、思い通りにはいきません。ニホンアカガエルも孵っていず、カワヅザクラも咲いていないのは残念でした。
（画像は、下見、当日以外の日のものを含みます。）

●集会所からの散策路入り口にて

これから困る人が多々出るであろう花粉症の原因のひとつの**「スギの雄花」**です。名古屋ではこの日は「少ない」予報が出ていました。ご存知のようにスギなどの裸子植物は花粉が風で飛ばされる風媒花です。
叩いて見て、花粉の様子を見ようかとも思いましたが、花粉症の私も含めて、参加者の方々のことも頭をよぎり、勇気が出ませんでした。
雌花（将来のスギボックリ）はもっと枝の根本の方に着きます。

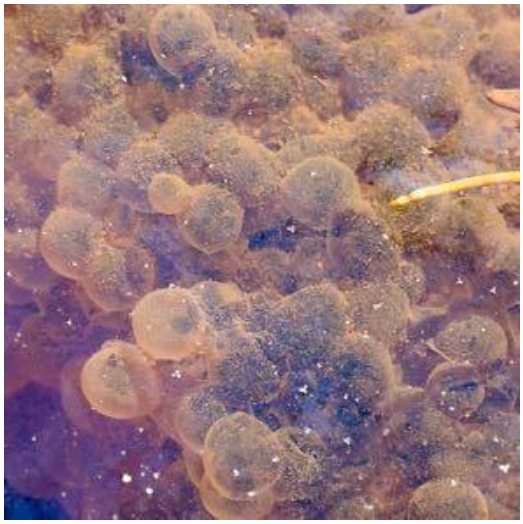
●散策路にて

何回かこの観察だよりでも登場している**ヤマコウバシ**の木。葉が冬になっても落ちないので受験生に人気の樹としてよく紹介されますが、実は日本には雌株しかありません。（中国には雄株があるとのことです。）
雌株 1 本でタネを作り、増えています。最近の研究では、遺伝子を調べたところ、「日本にあるヤマコウバシは全て同じ」という結果が出たとのこと。要するに、初めの 1 本があって、全てそれから殖え、日本全国に広がった、ことになります。研究の詳しくは次頁のアドレスにて。

https://www.tohoku.ac.jp/japanese/2021/02/press20210226-01-lindera.html

●ニホンアカガエルってどんなカエル？（シダレザクラの里にて）

ニホンアカガエルの卵塊（卵のかたまり）（今年の初産卵は２月１０日？）



このカエルは日本では最も早い時期に産卵をするカエルです。

猪高の森では１月下旬頃～2 月頃に産卵をします。

産卵場所：水田、湿原、湿地の水たまりなどの浅い止水

卵　　：卵塊は軽く卵を押しつぶしたような形で、卵数は 500～3000 個、卵の直径は約１.３～２ｍｍです。卵は約２週間でオタマジャクシになるようです。

オタマジャクシ：最大の大きさは約４５ｍｍ、変態までの期間は約３カ月です。

変態時期など：変態の時期は５月ごろ、変態時の体長は１５～１９ｍｍほどです。
産卵後の親ガエル達は、再び眠りにつき、５月ごろに活動を始めます。

さて、ニホンアカガエルはなぜこの時期に卵を産むことを選んだのでしょう？
水生昆虫などの天敵たちが活動を始める前に産卵を済ませ、孵化（オタマジャクシ）をすることにより、より多くの子孫を残そうとしている、と考えられています。

陸に上がったアカガエルは、木に登ったり、水に入ることはほとんどなく、湿り気のある地上で生活します。５月にはミニガエルたちに出会えるかもしれません。

猪高の森では、ここシダレザクラの里の他にも、塚ノ杁池、こもれび池、井堀の棚田、メダカ池、すり鉢池などでも、卵塊が見られます。

今回は残念ながら見られなかったオタマジャクシも、**次回の観察会（３月２７日（日））**ではきっと確認できるでしょう。

左は**ミツマタの蕾**、開花を期待していたのですが、これもまた残念ながらまだ先でした。

強靭な繊維ゆえに、和紙の原料となる代表的な樹です。

万葉集には、柿本人麻呂の次のような歌が書かれています。

「春されば　先ず三枝（さきくさ）の　幸（さき）くあれば
後にも逢わむ　な恋ひそ吾妹（わぎも）」

三枝（さきくさ）とはミツマタのこと。3 つに枝が分かれていることを観ています。【解説：三枝の（さき）は幸（さき）に掛かっており、春になると真っ先に咲くミツマタのように、幸せに暮らしていたら、また後に逢えるはずだから、そんなに悲しまないでおくれ、愛しいひとよ・・。しばしの別れに愛しい人を慰めているのか、思いやっているのか、そんな複雑な感情が表れている、男女の別れの歌です。－ニュース和歌山　2021 年 2 月更新　万葉植物散策　松下　太－より】

コロナ禍で行き来出来ない私たちの心情にも通じる歌でしょう。

来月もここシダレザクラの里に寄りたいですね。

●こもれび池でカワセミに出会う！

運よく登場してくれました。（観ることが出来なかった参加者もみえます。）カワセミは留鳥ですので、出会いが有れば一年を通して、観察のできる鳥です。

ブルーの色が美しく、さぞかし目立つだろうと思われがちですが、自然界の中では意外と保護色になりやすく、あそこにいる、こっちにいると言われても、中々判りません。

「チィ―ッ」という細く、鋭い声が近くで聞こえたら、そこいらに居るはずですから、探して見てください。カワセミは、渓流に住む深山の鳥と思われている人もいるようですが、水辺に住む身近な里山の鳥です。

何度か通うと**運次第ですが、見ることが出来ます。**

下段の 2 枚は欄干に乗っていたカワセミの**ペレット**です。

ペレットとは消化できない魚の鱗や骨、ザリガニの硬い外殻などの塊で、舌を上手に使って、カワセミは吐き出します。右の画像の実物をよく見ると、キラキラ光った魚の鱗を確認出来ます。

左はもう一つの青い鳥、**ルリビタキ♂**です。漂鳥ですので、春になると四国以北の高山の林などに移動してしまいます。

右下の画像は♀タイプです。

鳥の仲間にはオスとメスの姿が異なることがよくありますが、ルリビタキの場合、若い♂は目立たない♀と同じような色合いをしています。

この日は、姿を見せませんでした。「ヒッ、ヒッ」や「カッ、カッ」と鳴きます。

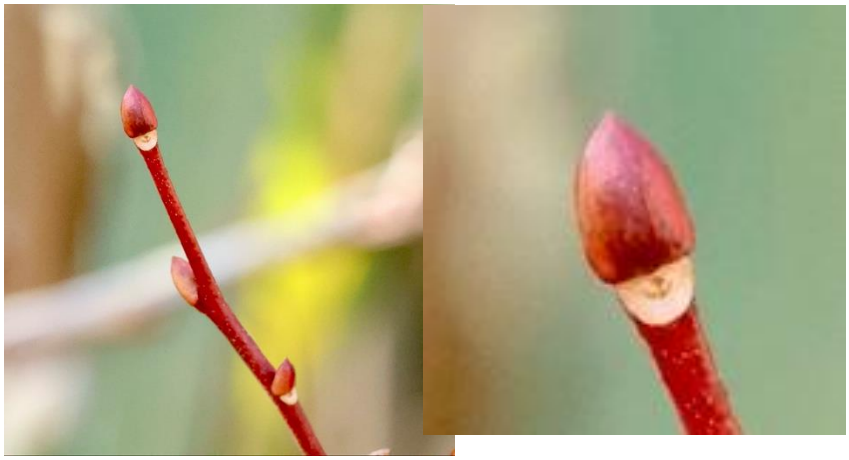
●いろいろな冬芽と葉痕

散策路にはまだまだ、冬の佇まいがありました。

左は**ハリギリ**、うつむき加減の顔に見えますが・・。

これは、**カラスザンショウ**何か、叫んでいます。

これもまた大声で何か、話しているようです。「勝手に写すんじゃないっ！」とでも・・。
ホウノキです。



ネジキの赤い芽。
日に当たっている所は赤みを増しています。
赤い三角帽子を被った笑っている小人さん。

冬芽と葉痕については、先月号（１月号）に詳しく載っています。

●棚田もだんだんと春の装いに・・畑も・・

陽だまりに咲いていた**オオイヌノフグリ。**

私たちの日常にすっかり溶け込んでいるこの花ですが、実は、西アジアを原産とするオオバコ科の外来植物です。外来植物といってもその歴史は非常に古く、明治 14 年ごろに初めて渡来した、と言われています。140 年の間にお馴染みの花となっています。

漢字で書くと「大犬の陰嚢」別名「星の瞳」。名前の由来には、学名を含めていろいろなエピソードがありますので、お調べになっては、如何でしょう。

12 月号で紹介している棚田にある**ハンノキで越冬していたヨコヅナサシガメ**は、まだそのままでいましたが・・

暖かい日には左のように、**ホソヒラタアブの仲間**が早咲きのスイセンの花に見受けられました。

これは、「残念でした」の絵です。2 月 18 日に写しましたが、咲いていると思っていた樹が、まだほとんど蕾だった**カワヅザクラ**。数輪しか咲いていないので、

開花宣言は出せません。

左上は**ニホンタンポポ**、左下は**タネツケバナ**の仲間、中上は**ホトケノザ**（春の七草で言われるホトケノザはコオニタビラコのことで別種です）、右は**コハコベ**。

足元にも春は確実に近づいています。

田んぼの水の中でも、**モノアラガイの仲間**が、活動を始めています。水が暖かくなってきたのでしょう。

左は**ヤマノイモ**の種、キラキラと陽に映えています。その隣では**シジュウカラ**（右）は混群を解消し、さえずりをしています。冬と春の混在です。（混群については９月号、さえずりについては１月号に解説があります。）

●お願いします。見られたら至急連絡してください。

１月末に**ヌートリア**がこもれび池にて確認されました。
２月には塚ノ杁池からも確認報告があります。
ヌートリアは特定外来生物に指定され、日本の侵略的外来種ワースト 100 に選定されています。
堤体に穴を開け、稲の苗を食害する危険があります。
猪高の森にてヌートリアを確認された方は、名東自然倶楽部までご連絡ください。

季節は移り変わり、その月毎の自然があります。

一緒にあるきませんか？

次回は、３月27日（日）

テーマは「里の春探し・春の七草探し」

森の集会所集合にて　９:30～12:00ごろ　です。